

あるが、韓国・朝鮮の歴史を知ること、日本を知ることにもつながっていくはずであり、朝鮮史研究の意味は小さくないと思われる。これからの人生においても、現地の研究者と一緒に汗をかき、ともに働き、ともに悩みながら、「頭と足と体でかせぐフィールドワーカー」として、朝鮮史を追究していきたいと考えている。

## むかしのヒト、いまのヒト

—中世スペイン史から—

黒田 祐我

講演者は中世スペインの歴史を専門として既に八年近く経ているが、そもそものきっかけは高校時代の世界史教師、そしてハリウッド映画やゲームに触発されて、何となく中世ヨーロッパ史に関心を抱いただけであつた。その後早稲田大学に進学し、アミン・マアルーフ著『アラブが見た十字軍』と出会う。歴史とは一面的なものではあり

えず、西洋とイスラーム世界で、それぞれの十字軍認識が存在してきたことに感銘を受け、その後大学院へ進むにあたって西洋とイスラームの狭間に位置するスペインに多大な関心を寄せるようになった。周知の通り、中世スペインとは、高校世界史でレコンキスタ（再征服運動）の名のもとに、一頁程度だけ取り扱われている地域であるが、ここでは八百年近くの長きにわたってキリスト教徒、ユダヤ教徒、そしてイスラーム教徒が対立と共存を繰り返していた。

さて、まず「歴史学とは？」との問いを投げかけた。当り前ではあるが、(1)過去に起こった事象を、(主として)文字史料を手がかりに再構築する営みであり、そして(2)再構築された事象の意味を問うていく営みであろう。しかしながら、この(2)における「事象の意味」とは、あくまで各々にとつての意味とならざるを得ず、当然ながら、生きた時代、国や地域、さらには家庭環境などなどから生じる興味・関心に応じた意味を求めようとする。これらは歴史学が常

に抱え込んでいる否定しえない課題であり続けている。この点が、おそらく暗記科目と揶揄されることの多い高校世界史との最大の相違点であろう。

先に述べたように、講演者は中世スペイン史を専門としており、二〇〇五年から二〇一〇年まで、スペインの二つの大学で現地の研究者と意見交換を交わしてきた。この経験をもとに、中世スペイン史に関してのいくつかの見方を例として提示した。

まずは、欧米メディア（日本も含むであろう）による主流の見解である。九・一一以降、ハンチントンによる「文明の衝突」理論の提示ともあいまって、宗教を異にする文明同士の対立が叫ばれて久しい。この世相を反映してか、マスメディアは現在の世界情勢への教訓として歴史へと目を向ける。具体的には、中世の十字軍、ジハード、そしてこれらが過激に実施されたとされる中世イベリア半島へと関心を抱き、そこで花ひらいた「宗教的寛容の文化」を過度に強調しているのである。

